

評価項目	自己分析
1. 教育課程（プログラム実施状況、カリキュラムの妥当性）	システム安全工学分野（システム安全工学専攻を含む）では、カリキュラムポリシーに基づき、学生がシステム安全に関する知識と応用力を深めるため、安全原理や技術者倫理、リスクアセスメントなどの講義と演習を通じて研究能力と実務能力を涵養し、インターンシップで実践的な経験を積む機会を提供している。令和5年度には、「システム安全概論」をはじめとする29科目を開講し、1年生16名、2年生12名の計28名が受講しシステム安全に関する知識・技能を修得している。
2. 教育成果（各科目の成績評価、人材育成効果（身に付ける能力を習得したか））	本分野を修了するためには、大学院工学研究科に2年以上在学し、必修科目7単位、選択必修科目6単位以上、選択科目17単位以上、総計30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、修士論文を提出してその審査および最終試験に合格する必要がある。令和5年度は8名が本分野を修了した。また、本学のすべての講義を対象に実施している授業アンケートにおいて、学生からの評価が全学平均で1学期3.50、2学期3.59（数値が高いほど好評価で4が最大）となっているのに対し、本分野は1学期3.70、2学期3.76と受講した学生から評価を受けており、学生が満足できる教育を提供できていると判断している。
3. 学生支援体制（学習支援体制・学習支援状況）	本分野では、全国各地に在住する社会人学生の状況も考慮し、修了に受講が必要な授業は対面とオンラインを併用するハイブリッド方式にて実施することを原則としているほか、土日祝日での集中した授業開講、東京サテライトキャンパスでの受講、e-learningなど、社会人学生が受講しやすいプログラムとなっている。また、長期履修制度も整備しており、令和5年度は2名の制度利用があった。その他、本分野のプログラムは令和5年度より専門実践教育訓練の指定講座として認定を受けており、第1学年入学者16名のうち10名の学生が本制度を利用している。
4. 組織運営（教育組織の適切性・妥当性など）	本分野は、系長及び専攻主任の下、システム安全工学の体系に沿った科目が編成されている。専任教員は、大学その他、行政及び関連研究機関や民間企業での豊富な職業経験と国際規格審議や海外勤務などの国際経験を有する人材により構成されており、兼任教員・非常勤講師については、国際特許事務所を自ら経営する弁理士、認証機関在籍者、弁護士、公認会計士など実務経験のある教員を配置し、適切に授業の運営を図っている。また、企業等で職業の実務に関し豊富な経験を有する者、学識経験者及び本学教職員等により組織する「長岡技術科学大学大学院工学専攻システム安全工学分野教育課程連携協議会」を開催し、教育課程の編成及び実施に関して意見交換を行っており、企業等からの意見・評価を取り入れながら教育課程の編成を行う仕組みを整えている。
5. 施設設備（施設及び設備の整備状況）	本分野では社会人が受講しやすいよう、長岡のキャンパスのほか、東京のサテライトキャンパスやオンラインでの受講ができるよう体制となっている。また、長岡のキャンパス内には24時間利用可能な図書館の豊富な蔵書や各種の学習スペース、教育研究設備など、学生が学修・研究の質を高めるための環境を整備している。
6. 広報活動（受講生の募集・広報活動）	本分野ホームページ上にて、分野の特色、教育プログラム、修了生からの声、教員紹介、受験情報等随時発信を行っている。また、本分野または安全に興味のある方を対象として、特別講演会及び分野説明会を定期的に開催し、本分野への進学に関心を持ってもらえるよう取り組んでいる。

外部有識者からの評価

令和6年8月21日（水）に「長岡技術科学大学大学院工学研究科工学専攻システム安全工学分野教育課程連携協議会」を開催した。この会議では、本学の基本理念やシステム安全の定義、本分野の目的、社会人学生に配慮した授業方式、経済的支援、学生からの評価（授業アンケート結果等）など、本学および本分野に関する概要や教育プログラムについて外部有識者に情報提供を行った。その後の意見交換では、化学物質の規制やメンタルヘルス、製造現場での安全管理など、社会人学生が実務に活かせる内容の講義の重要性や、本分野の教育の特色、安全教育の後継者育成について、外部有識者と本学教員との間で議論が交わされた。全体として、実務と研究のバランスを考慮した教育が行われており、今後の発展が期待されるとの評価をいただいた。